

想像界の生物相

刺繍に見るミャオ族の宇宙

よこやま ひろこ
民博 名誉教授 横山 廣子



資料名	女性用前掛け（ハレ用） *特別展「驚異と怪異—想像界の生きものたち」で 展示中（11月26日まで）
標本番号	H0226487
地域	中国
サイズ	縦 75cm × 横 68 cm

*撮影：大道雪代

赤を基調とする刺繍が一面に広がる前

掛けは、中国貴州省の東南部、施洞鎮のミャオ族の母親が娘の晴れ着用に縫い上げたものである。ミャオ族は地域ごとに華麗な民族衣装で知られるが、特に施洞鎮は刺繍の見事さで突出している。切り紙で作った型紙を布に貼り付け、その上から針を刺していく技法は、ミャオ族に広く見られるが、施洞では絹糸の撚りをほどこき、一本を数本からときに一〇本以上にもわけて細くし、サイカチの実が原料の糊をつけて滑りを良くし、艶を出す。その糸を平縫いで布の裏表にわたしていくことで文様に細やかな光沢と厚みが生まれ、刺繍の迫力が増す。しかし、手仕事の精緻な美しさもさることながら、個々の文様に目を凝らすと、奇想天外な姿やその躍動感に心を奪われる。

◆◆刺繍と歌による伝承◆◆

中央で龍が体をくねらせている。中国では龍は皇帝の象徴でもあり、明代ごろまでにその基本形が完成したとされる。中国の標準的な龍に見られる鋭い爪、鱗、体のトゲ、口に含んだ宝珠は、この龍にもある。しかし水牛の角がはえていて、そもそも雰囲気はまったく違う。そこには水牛の力に頼ってきたミャオ族の農耕生活が色濃く反映されており、龍は水を司るのみならず、農業神、祖先神として重要な信

仰の対象となっている。

龍の左右と、前掛け全体のそここに蝶が刺繍されている。ミャオ族が歌い継いできた起源神話では、人間や動物など万物を産んだのは「蝶々母さん」である。最初にフウの樹（ユキノシタ目の被子植物）から虫が生まれ、蝶となって二個の卵を産み、そこから生き物がかえる。歌い手によつて生き物の顔ぶれに出入りがあるが、人間の祖先や雷神とともに必ず歌われるのは龍や虎、水牛、蛇である。ミャオ語でチーユーとよばれる霊鳥も起源神話に登場し、辛抱強く何日も卵を抱え、生き物の誕生を助ける。前掛けの左右部分に花とともに四羽刺繍されている鳥は、このチーユーだという。

伝統的に文字をもたなかったミャオ族の場合、歌とともに刺繍がその超自然的世観の伝承に大きな役割を果たした。

◆◆変幻自在な生き物たち◆◆

中国の伝統文化からの影響もうかがえる。前掛け最上段中央をはじめとして随所に見られる、ギョロ目で耳が左右に垂れ下がった獅子は、中国で一般的な獅子と造形的に類似している。前掛け左右の花鳥を刺繍した部分の中心の花は、ミャオ族のあいだでも牡丹あるいはコウシンバラと意見がわかれるところだが、蔓の曲線に花を

巻き込んでしまう牡丹唐草などの中国的文様の影響が感じられる。

下から二段目に刺繍されている象は、長江流域の新石器時代の地層から化石で発見されているが、現在、貴州省には生息していない。しかし起源神話で二個の卵のひとつから生まれたと歌われることがあり、古い時代の刺繍図柄にもある。象の文様は中国から導入されたと言いはれ、謎が残る。他方、刺繍に登場する動物たちの多くは、ミャオ族の周辺に実際に生息している。蝦、魚、蛙など水中生物が多いのは、施洞が清水江沿岸にあり、水田や水路も多いことと関係があるろう。しかし、近くで観察できるそれらの生き物でも、ミャオ族の刺繍は写実的ではない。白い布地の上の刺繍は、どれもが装飾的なヴァリエーションに富み、独特なユーモアを有する。

刺し手は自在に細部を変化させるのをあたかも楽しんでいくかのようである。その最たるものは龍で、水牛の角や手足が消えていたり、魚のような尾びれがついていたり中央の龍とは相当異なる形のもの、がたくさん刺繍されている。この前掛け以外の施洞のミャオ族の刺繍では、鳥やムカデ、蛇、蚕、魚、人面、葉っぱなどの造形を組み込んだ龍が見られる。龍は変化する人びとは言う。それは彼らの超自然的宇宙そのものである。